令和６年度一般入試個別学力検査【後期日程】「国語」

Ⅰ（配点 135 点）　出典：野々井透「棕櫚を燃やす」（『太宰治賞　2022』）

大きな病を抱える父と、それに寄り添う姉妹の話。父の病の重さに心を痛めながら、自身と妹が抱える生きづらさが語られる。文学的な表現はしばしばあるが、話の内容はとりやすいものであったと思われる。その分、解答では、表現に託された思いなどをしっかり考えて読み解いてほしい。問題文中から文章を抜いてきてそれらを切り貼りしたような解答がみられたが、そういった方法ではなく、自分の言葉で記述できることが望ましい。

問一　Ａ　振動　Ｂ　断然　Ｃ　宴席　Ｄ　親睦会

書き取り問題。Ａは「震動」とするものがあったが、自然現象の揺れや巨大なものが揺れる意味を指すのでここではふさわしくない。Ｃは「宴」のなかの「日」字に余計な点画がついているものが見られた。最も誤答が多かったのがＤで、「陸」（類似形による誤解であろう）や「朴」（発音の連想による誤解であろう）という間違いがあった。日常生活等において手書きの機会は一般に減少している傾向にあるが、字体を正確に覚え、一点一画をはっきり書いてほしい。

問二　①ちぎょ　②のどもと　③さいじ　④きょうせい

読みを問う問題。とくに①②の正答率は極めて高かった。

問三　比喩表現を読み解く問題。

ア、漂白されたような、とは病身の父の生気が衰えていることとともに、屋外で日を浴びる機会も少ないであろうことを思わせる。

イ、再び内部に帰って行く、とは、表面上は消えたようにみえるが、父の体の中から消え去ってしまったわけではない、ということである。「再び」とは、出てきては消え、という繰り返しがあることをも、思わせる。つまり治癒したわけではないのだ。

ウ、水越しに見る風景とは普通ゆがんで見えるだろうが、それがさらにゆがむ。世の中の見え方、それに対峙する自分の気持ちにさらに確信が持てないようになっていく、というのである。

問四　澄香の考え､気持ちを推察する問題。

間違いではないが十分とは言いがたい解答が目立った。たとえば「明日からもそれでいいんだと思う気にさせてくれるから」というのは誤りではないが、この一文だけでは不十分である。「みんなのふつう」に対置して、澄香は自分のふつうを大事にしていいんだと気づき、そして励まされる気持ちになっていることにもはっきり触れる解答であってほしい。

なお、傍線直後で、「私」が、「自分のふつうのほうが断然大事で、通常から自分のふつうを優先しすぎているてらいのある私」といっており、そういう意味で、妹と対照的であることがわかる。解答では、澄香の「また明日今日と同じ時間に起きよう……」と事例を列挙しつつ語られているところをも踏まえて、補足的に解答するとなおよい。

問五　この問題は、あまりできはよくなかった。

「私」の反応についての問いである。「私」は本文にもあるように、「自分の普通」を優先しすぎるてらいがあるほどである。従って「自分のふつう」のほうが大事といわれる垂れ幕に、同意できるけれども、妹ほどには感慨を覚えないのだとみられる。しかし、「後押しされる」とせっかく励まされている妹の思いに水を差す気もない。よって深く考えないうちに、ともかくも否定しない意思を示すべく「いいかも」と肯定的な言葉で即答しておくのであった。あとの箇所にも、「澄香」は物事を肯定的に納得しながらすすみたい人、とある。姉としてその性分に沿いたいのであろうとみられる。また、傍線Ｙ（二回目の）「「いいかも」とやはり考えずに返事する」は、そもそも上記のような受け止め方なのだから、フォントによる印象の善し悪しなど、なおのこと「私」はどうこうとコメントしにくい。が、ここでも、妹が＜よい評価を下していること＞についてわざわざ水を差すようなことをしたくないということから、「やはり」、同様の反応をまたするのであった。

問六　（ａ）（ｂ）ともに最もよくできていた。姉妹はじめ、それぞれの固有の「ふつう」と一般化された「ふつう」に対する「私」の感慨をよみとれるかという問題。

（ａ）一般化されるということは、個別から抽象するということであり、皆に共通する分、個々の具体的な思いやこだわりは捨てられる。「一番外側」ということは、コア（核）となるような個別的なありようは反映されていない、うわべのものだ、といえる。

（ｂ）皆に共通する分、己の個性は隠蔽されるわけだから、うわべだけとはいえ、その中に居さえすれば、異端視されたり疎外されたりする心配はない。（ａ）で問われたように、脆いとわかっているものだが、当たり障り無く溶け込めるという意味で、安心できてしまうものでもあるのである。

問七　父の言葉、スタンスのありかたと、それをうけての姉妹の心のありようを聞いた問題。

（ａ）比較的よくできていた。「そういうこともあるだろう」とは、出来事をありのままに受け入れ、固執しない姿勢。世の中に、自身に、そして他者に対する理解として、そのように言うのである。

（ｂ）世の中の普通になじめない姉妹は、仕事が長続きせず、きちんとしようとおもってもうまくいかない。そんなとき、父が「そんなこともあるだろうさ」といってくれると、そういった思いにとらわれた状態から解放され、救われたような気持ちになる。

たとえば「父の言葉に慰められるから」とこの一言だけでは解答として不十分である。また、「職場に対する未練をもたないで済む」というような、具体的事例（仕事のことなど）にあてはめた解答がしばしばあった。執着から解かれるというのはそのとおりだが、職場や仕事のことのみならず、彼女たちの人生、生き方というところまで抽象された話なので、その点、個別的・具体的すぎる解答にならないよう、注意されたいところである。

Ⅱ（配点 90 点）　出典：『三宝絵』

平安時代に源為憲が尊子内親王のために著した仏教入門書『三宝絵』より、日本仏教史上、古代において大きな画期を成した聖徳太子をめぐる伝説を記した部分である。前半は、聖徳太子が小野妹子に中国まで法華経を取りに遣わしたが、間違って太子の弟子の経を持って帰ってきたので、太子が夢殿に籠もっているあいだ、自ら魂を飛ばして取りに行ったという話。後半は、そのような太子が死を覚悟して后と文字通り偕老同穴の契りを誓う話である。

問一　基本的な単語の意味を問う問題である。Ａの「さぶらふ」は、貴人にお仕えする意。Ｂは「死なむ日」の「む」が仮定の意。私がもし死んだら、そのような日には、ということである。おおむねよく出来ていた。

問二　「そこ」が衡山の般若寺であることを明記し、「法華経の、あはせて一巻にせる、あらん、請ひてもて来たれ」の部分を「法華経で、合わせて一巻にしたものがあるであろう、それを求めてもって来い」と丁寧に補って書くことが求められる。

問三　助動詞「なり」の二種類の意を判別する問題。Ｘが伝聞・推定、Ｙが断定である。どちらか一方だけ正解の場合は部分点となる。

問四　何と何を「見合は」せたのかをまず明らかにすることが肝要である。妹子が取ってきた法華経と太子が取ってきた法華経とを比較検討したのである。「かれ」は遠称だから、文章では先に出てきた妹子の取ってきた経の方を指す。妹子の取ってきた法華経で脱けていた字が、太子の取ってきた法華経にはきちんと書かれてあった、というように書かれていればよい。

問五　傍線部分を含む段落のみならず、二段落目の内容を理解して書くことが求められる。太子が七日七夜夢殿に籠もっていた間に、太子が自らの魂を飛ばして中国に法華経をとりにいったという話が、衡山の僧の目撃談によってほんとうのことであったことが明らかになったのである。

問六　現代語訳の問題。ポイントは「こそ思へ」の係り結びで文が終わらず続く、つまり逆接であることを捉えていることと、「何心ありてか」とあるから、いったいどういうつもりで〜〜とおっしゃるのでしょうか、と疑問文で訳出されていることの二点である。二点ともきちんと書けていた解答は少なかった。また「千々の秋、万の歳」の「万(よろづ)」を「多種多様な」の意で訳しているものは減点の対象となる。文字面から「千秋万歳」という漢語が思い浮かぶように、千年万年の意である。

問七　（ａ）同じ段落の中で、太子が自分の死ぬ日のことに言及していることを捉えて、長くこの世にとどまろうとは思っていない、という方向で書いてあればよい。
（ｂ）「本文全体の内容に即して」とあるが、傍線部の直前を現代語訳しただけの解答が目立った。太子が転生を繰り返しつつ法華経を護持して仏の教えを広めていたことを読み取り、太子が今生の日本での使命はすでに果たしたと考えていることをつかんでほしい。正答率は非常に低かった。

Ⅲ（配点 75 点）　出典：范曄『後漢書』逸民伝

　范曄が編纂した『後漢書』は、後漢一代のことを記した歴史書である。逸民伝の逸民とは隠者ともいい、自ら政治から隔たり、己の信条に基づいて暮らす野にある賢者を指す。漢文学の世界ではしばしば世を風刺する存在として登場する。冒頭の「何許（いづこ）の人なるかを知らざるなり」、末尾の「其の姓名を問ふも、告げずして去れり」は、隠者に関する逸話にしばしば見られる表現である。

　皇帝の巡幸は大勢の官が随行する豪奢な旅であり、桓帝の巡幸のきらびやかな様子はさぞ人の目を惹きつけるものであったに違いない。皆がそれを見物に行ったにもかかわらず、ひとりだけ田を耕す手を休めない者がいる。それが気になった張温は人をやって理由を尋ねさせるが、この老父は笑って答えない。そこで張温は自ら乗り物を下りて歩いて老父のところに行き、直接問いかける。老父は、自らの逸楽のために巡幸する桓帝の行いは、古代の、世が治まっていたころの聖王が質素な暮らしをしていたのとはかけ離れたものであり、官にある張温がそれについて全く無自覚であることを批判する。それを聞いた張温は、しかるべき官にありながら皇帝を諫めようともしないどころか、巡幸を見に来ない老父を訝しむという自らの愚を悟る。

　受験生には設問の傍線箇所のみを見るのではなく、文全体を読んで内容を把握してから

解答してほしい。傍線の当該箇所のみを見て問題を解こうとすると、全体の筋を追うことができず、珍妙な解答になりがちである。

問一　基本的な読みを問うた。Ａ　いづこ　Ｂ こたへ　Ｃ　のみ　Ｄ　この
ＢとＣはよくできていたが、Ｄについては正答率が低かった。

問二　　ａは二重否定の書き下しの問題で正答率は高かった。ｂの言葉を補って現代語訳する問題の正答は、「桓帝の巡幸（の様子）を見物に来ない者はいなかった」。原文は「莫不観者」であって、「莫不見者」ではない。皇帝の巡幸は大勢の随行者や儀仗隊を引き連れた豪奢なものであったはずで、だからこそ民はこぞって桓帝の巡幸を見物しようとしたのである。「桓帝を見ない者はいなかった」では、言葉足らずで、意味も違ってくるので減点した。

問三　内容把握の問題。「他の者はみな桓帝の巡幸の見物に来ているのに、老父だけが来ずに田を耕し続けていた理由」という方向で説明してあればよい。正答率は高かった。

問四　内容把握の問題。ここでは誰のどのような行いを指すかという設問なので、「桓帝が自らの逸楽のために（天下の民が迷惑するような）巡幸を行っていること」という方向で説明してあればよい。正答率は高かった。

問五　現代語訳の問題。「桓帝の巡幸の様子を眺めさせようとして君は何とも思わないのか（平気なのか)」という方向で訳されていればよい。「子 何ぞ忍びて人の之れを観るを欲するかと」は、「子 何ぞ人の之れを観るを欲するを忍びんやと」訓じてもよい。重要なポイントは、ここの「忍」の解釈である。日本語にも「～するに忍びない」という言い方があることを思い出してほしい。「隠れて」や「こっそり」と訳すのは全くの誤答である。Ⅲの中では、この設問の正答率が最も低かった。

問六　全体の内容把握の問題。ポイントは、張温が漢陰の老父の言葉に「大慚」したのはなぜかという点である。「桓帝が自らの逸楽のために民を煩わせる巡幸を行っているにもかかわらず、臣下である自分がそれを諫めようともせず、却って巡幸を見にこない老父を訝しむという愚をおかしたことを悟ったから」という方向で説明されていればよい。部分点あり。